

主体的に生活の向上を目指す子どもを育む家庭科の授業づくり

—問題解決的な学習の「課題発見」、「評価・改善」の過程の充実を通して—

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
金田侑子

I はじめに

学習指導要領の改訂にあたり、これからはすべての教科等や諸課題に関して①知識及び技能②思考力・判断力・表現力等③学びに向かう力・人間性等といった育成すべき資質・能力の三つの柱を設定し、「何ができるようになるか」等を明確化するように求められている。なかでも③に関しては、学習活動を通してどのように社会・世界と関わり、よりよい生活をしていくかを主体的に考えることができるような子どもを育むことが求められている。さらに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることや「習得・活用・探究」という学びの過程が重要であるとされている¹⁾。

家庭科の学習においてもこれらの方針に迫るため、現在の筆者自身の教育内容における課題及び子どもたちが抱える課題を明らかにし、その改善に向けて授業の工夫に取り組む必要があると考える。

II 主題設定の理由

1 家庭科における今日的な教育課題から

(1) 家庭科における問題解決的な学習の必要性

家庭科では、個人・家族・地域社会のウェルビーイング向上を目指した生活を創造するために、生涯を通して様々な生活問題を解決する能力の育成が求められている。しかし、個人と家族の関係をどうするか、個人・家族と地域社会の関係をどうするかなどの多様な問題を解決する能力を育むということはとても難しい。生活に関する知識・技能を習得しただけでは、ある場面において生活をよりよくしていくための課題を見出す力や、場面に応じて適切に使うなどといった応用力までは育むことができない。それゆえ、知識、技能の習得のみでは、あらゆる生活問題を解決することは不可能であると考えられている。そこで、家庭科の学習に当たっては予想される生活問題を疑似的に体験することが効果的と考えられ、実践的・体験的学習、問題解決的学習を組み入れることが推奨されてきている²⁾。

また、中国(2017)は山梨県の小学生を対象とした調査において、家庭科の学習後に、生活上必要なことを「自分でできる」という意識は高まっているものの、学習したことを生活の中で実践し、生活がよりよくなったと実感した経験をもつ子どもが少ないということが分かったと述べている³⁾。

これらのことから、子どもたちには、現在の生活の中にある課題を察知し、その課題の解決に向けて考え

たり工夫したりするという機会をもたせることが必要であると考えられる。子どもたちにそのような機会をもたせるためには、まず課題を見出す力を育成することが必要不可欠である。そして、実践したことを振り返りそれを評価し、さらに新たな課題を見つけ実生活に生かしていこうとする姿勢を養うことが、現在ある教育課題を解決する一つの手立てになるのではないかと考える。

(2) これまでの問題解決的な学習における課題

これまでも問題解決的な学習に取り組んだ実践例もあるが、その課題も指摘されている。

第一に、荒井ら(2009)によると、設定された学習課題の多くは、指導者が与えたものとなっている⁴⁾。つまり、子どもの主体性を育むためには、まず子ども自身が課題の設定(=「課題発見」)を行わなくてはならないと考える。

第二に、武添(2014)は、家庭科の学習において、問題解決的な学習の計画から評価までの過程を組み入れて構成された題材は多いが、それらは評価することによって見出された課題を更に追及し解決方法を考え、実践に生かすという過程を含めて構成された題材とはなっていないと述べている⁵⁾。つまり、生活の向上を目指すためには、実践を一度行って終了するだけでなく、その実践を評価し、生活をよりよくするための改善点を考えることで新たな課題を発見し、再び実践を行うといったように、二度三度と複数回行うことが大切であると考えられる。

2 新学習指導要領の動向

平成29年3月に公示された新学習指導要領では、家庭科の目標を「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次の通り育成することを目指す」としており、具体的な手立ての一つとして「日常生活の中から課題を見出して課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う」ことを提示している^{6) 7)}。

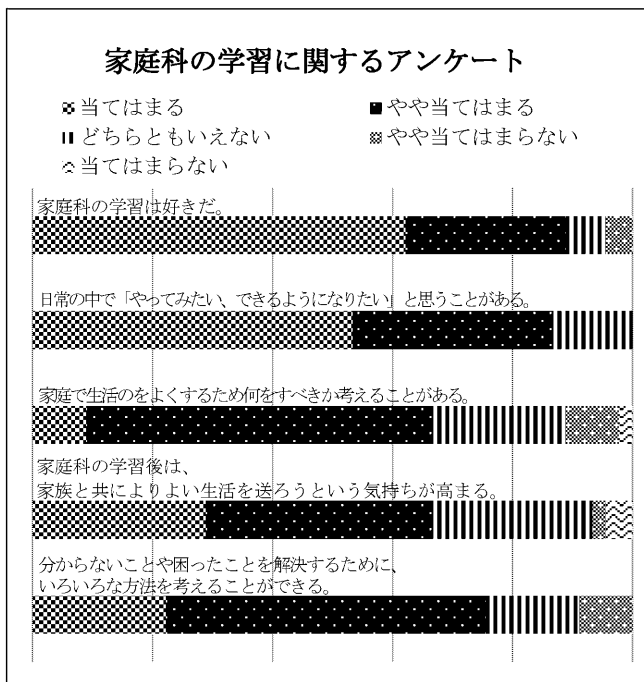
新学習指導要領からも、家庭科における学習は問題解決的な学習を取り入れて、生活をよりよくしようと工夫する子どもを育成するように推奨していることを読みとることができる。

3 子どもの実態

現任校で平成29年度5年生44名を対象に「家庭

科の学習に関するアンケート」を行った（資料1）。

現任校の子どもは、「家庭科の学習は好きだ」の項目に対して「当てはまる」、「やや当てはまる」という回答が全体のほとんどを占めており、家庭科の学習に対して意欲的な子どもが多く基礎的・基本的な知識・技能を身に付けようという姿勢が備わっていると考えることができる。また、「日常の中でやってみたい、できるようになりたいと思うことがある」の項目に対しては「当てはまる」という回答が半数以上を占めており、向上心がある子どもが多いことが分かる。しかし、「家庭での生活をよくするために何をすべきか考えることがある」の項目では、「当てはまる」の回答が極めて少なく、子どもたちは家庭生活を振り返り生活の向上に向けて思考を働かせることは十分にできていないのではないかと考えることができる。また、「家庭科の学習後は、家族と共によりよい生活を送ろうという気持ちが高まる」の項目では「当てはまる」の回答が3割程度にとどまることから、家庭科の学習を家庭生活に生かすことができていることや、自分自身も家族の一員であるということを自覚し、家庭生活における役割を果たさなくてはいけないという意識が育っていないと考えることができる。さらに「分からないことや困ったことを解決するために、いろいろな方法を考えることができる」の項目では「当てはまる」の回答が全体の5分の1程度にとどまることから、課題の解決に向けて改善策を考えることができないか、または、できたとしてもそれに自信をもつことができていないということも考えられる。



【資料1】アンケート結果

昨年度の5年生では、1学期に調理の基本、2学期に裁縫の基本の学習を行った。各単元の始めでは、現

在の生活を振り返り、生活の中の課題をどのように解決しているかを考えさせたところ、共に生活する家族（主に母親）がほとんどの課題を解決していると答えた子どもが多かった。このように、実生活では課題があっても他の人が解決してしまうため、子どもが家庭での生活をよりよくしようとする機会が少なくなっているのかもしれない。家族に頼るだけではなく、「将来」自分で、やっていかななくてはいけないということも考えさせた上で学習に取り組みせていく必要があると考える。

4 本実践研究の目的

以上のことを踏まえ、本実践研究では、問題解決的な学習の「課題発見」「評価・改善」の過程を充実させた授業を行い、子どもに主体的に生活の向上を目指す力を育むことを目的とする。これらを行うことが、今日的な教育課題の改善や現代を生きる子どもたちの生きる力につながると考える。

Ⅲ 先行研究から得られる本実践研究上の留意点

以下、家庭科の問題解決的な学習における「課題発見」の工夫の重要性や、「評価・改善」の工夫の重要性を指摘した先行研究について述べ、そこから得られる本実践における留意点をまとめていく。

荒井ら(2009)は、家庭科における問題解決的な学習の多くは与えられた課題を解決していく「課題解決学習」がなされていると指摘している。「課題解決学習」では、子ども自身が問題そのものを感知し、問題をつかみ、それに取り組むといった子どもの興味・関心から出発し、探究を保証する学習とは言えない。それゆえ、子ども自身が見出した課題を解決していく探究型の問題解決的な学習の必要性を述べている⁸⁾。そこで、本実践研究では問題解決的な学習を取り入れ、その最初となる「課題発見」を工夫をする。そして、自分自身の課題を発見させ、子どもが主体的に解決に向けて取り組んでいくという手法を取り入れていく。

大竹(2018)は、子どもたちは、自分に自信があればさまざまな場面で意欲的になり、その結果、生活が豊かになると述べている⁹⁾。また、河合ら(2015)は、現代の子どもたちの自己肯定感の低さを指摘し、小学校家庭科において、自分自身を肯定的に捉える自己肯定感を高める実践的な学習を行うことが求められていると述べている¹⁰⁾。このことを踏まえると、「評価・改善」の過程で、実践したことを振り返り、自他ともに、その実践のよかったところを認めるといった活動を取り入れ、子どもたちに自分の実践に対して自信をもたせることが大切であると考えられる。

また、鳥井(2005)は、評価について「学習者に自分の学習を振り返らせ新たな学習課題を見つけさせるためにも必要であり、学習者相互の評価を通して学習者自身が気付かなかった点に目を向けることで学習を深めることができる。このような自己評価や相互評価は、

家庭科授業で生活実践力を付けるために、さらには生涯学習を継続するために不可欠である」と述べている¹¹⁾。このことを踏まえると、「評価・改善」の過程では、自己評価のみで終わるのではなく、他者との意見交流や発表の場を設け、その中で、子どもたちで相互評価を行わせることが大切であると考え。相互評価を行うことで、子どもたちは新たな視点を持ち、さらに課題を改善していくことで生活の向上が期待できると考える。本実践研究でもグループでの実践報告会や学級全体での発表会を設け、子ども一人一人の課題に対する実践を他者と共有して、互いに評価し合う時間を設定する。

IV 研究の構想

1 目指す子ども像

現任校の子どもの実態や新学習指導要領の方向性を踏まえ、目指す子ども像を次のように設定した。

- ①自分の生活にある課題を発見し、その課題の解決に主体的に取り組もうとする子ども
- ②実践を振り返り、新たな課題に対し思考を働かせ、生活の向上を目指そうとする子ども

2 「課題発見」、「評価・改善」の過程を充実させた問題解決的な学習過程と実践研究の構想

筒井(2017)の「生活の課題を解決する学習過程」を参考に、問題解決的な学習過程を踏まえた実践研究の構想をまとめた¹²⁾(資料2)。

家庭科における問題解決的な学習は思考によるものだけではなく、行動によるものも含まれていると考え、取り上げる問題は具体的な実生活によるものでなくてはならない。目指す子ども像に迫るためには、思考による問題解決的な学習が関わって来ることが多いと思われるが、行動による問題解決的な学習と考えられる過程である「課題解決に向けた実践活動」も主体的に学習に取り組む子どもを育むうえで欠かすことのできない要素になる¹³⁾。

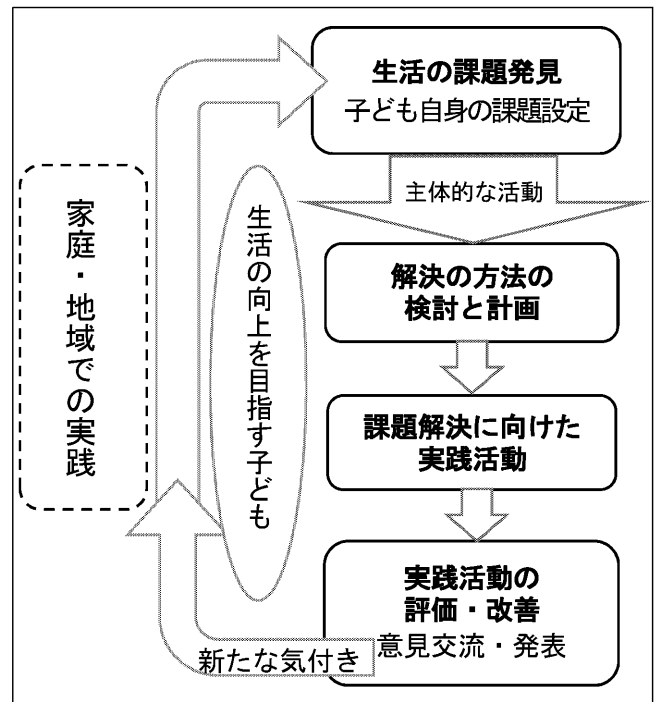
3 手立てについて

【自らの課題を見つける工夫(課題発見)】

本研究では、まず身近な話題を提示し、子どもたちに現在の生活には課題があるという意識をもたせる。そして、主体性を育むために、自分自身の課題を発見させるようにワークシートや授業の流れを工夫する。

【新たな課題を見つける工夫(評価・改善)】

課題発見の場で見出した自分自身の課題の解決に向けて活動し、「評価・改善」の過程では数値と自由記述による自己評価だけでなく、意見交流や発表の時間を設定し、他者との相互評価を行わせる。そして、互いの実践のよさを認め合わせたり、新たな気付きによって更に生活の向上を目指すために思考を働かせたりすることができるように学習を進める工夫をする。



【資料2】実践研究の構想図(筒井(2017)を基に作成)

4 検証方法

「自分の生活にある課題を発見し、その課題の解決に主体的に取り組もうとする子ども」、「実践を振り返り、新たな課題に対し思考を働かせ生活の向上を目指す子ども」が育ったかどうかを調べるために、本実践の事前と事後に同様のアンケートを実施し、その結果を基に分析することとした。実施したアンケートの質問内容は以下のとおりであり、社会科における「問題解決的な学習に対する意識調査」で用いられたアンケートを基に作成した。(資料3)

<p>【5件法を用いた選択式アンケート】</p> <p>家庭科の授業に対する意識の実態調査(3項目)、生活の課題発見(動機)に対する意識の実態調査(5項目)、解決の方法と検討(思考)に対する意識の実態調査(4項目)、解決に向けた実践(技能)に対する意識の実態調査(2項目)、実践の評価・改善に対する意識の実態調査(3項目)、家庭・地域での実践(応用)に対する意識の実態調査(3項目)の全20項目のアンケートを作成し、授業実践の事前と事後に実施した。</p>
<p>【家庭科の授業に対する意識の実態調査】</p> <p>① 家庭科の学習は好きだ。</p> <p>② 家庭科の学習は家庭や社会に関わる力を身に付けるために役立つと思う。</p> <p>③ 家庭科の学習が整理や裁縫など生活に必要な力を身に付けるために役立つと思う。</p>
<p>【生活の課題発見(動機)に対する意識の実態調査】</p> <p>④ 日常生活の中で「やってみたい、できるようになりたい」と思うことがある。</p> <p>⑤ 家庭での生活をよくするために何をすべきか考えることがある。</p> <p>⑥ 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。</p> <p>⑦ 地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。</p> <p>⑧ 新聞やテレビのニュースを見ることある。</p>
<p>【解決の方法と検討(思考)に対する意識の実態調査】</p> <p>⑨ 本やインターネットを使って分からないことや困ったことを解決することができる。</p> <p>⑩ 電話やメール、インタビューで分からないことや困ったことを解決することができる。</p> <p>⑪ 分からないことや困ったことがあった時、その原因や状況を考えることができる。</p>

⑫ 分からないことや困ったことを解決するために、いろいろな方法を考えることができる。
【解決に向けた実践（技能）に対する意識の実態調査】
⑬ 分からないことや困ったことを解決する時、何から始めればよいか考えることができる。
⑭ 自分が集めた情報や考えた計画をもとに行動することができる。
【実践の評価・改善に対する意識の実態調査】
⑮ 実際にやったことを振り返り、よかったことや悪かったことを考えることができる。
⑯ 実際にやったことの中で、自分の考えや工夫を友達や家族に伝えることができる。
⑰ 他の人の考えや意見を聞いて、よいところは取り入れようと思えることができる。
【家庭・地域での実践（応用）に対する意識の実態調査】
⑱ 家庭科で学んだことを、家庭での生活に生かしている。
⑲ 生活をよりよくしようと計画したことは、失敗を恐れなくて挑戦できる。
⑳ 家庭科の学習後は、家族とよりよい生活を送ろうという気持ちが高まる。

【資料3】家庭科の学習に関するアンケート

家庭	○ 家庭での実践を行う。	課題発見、 検討と計画、実践活動、 評価・改善	
	○ 学習したことを生かして、家庭内の整理・整とんを行う。		
6	○ 家庭での実践報告会を行う。 ○ 友達の発表を聞き、振り返りを行う。	評価・改善 課題発見	
3	7	○ 「スッキリ 整とん名人」の学習のまとめをする。	

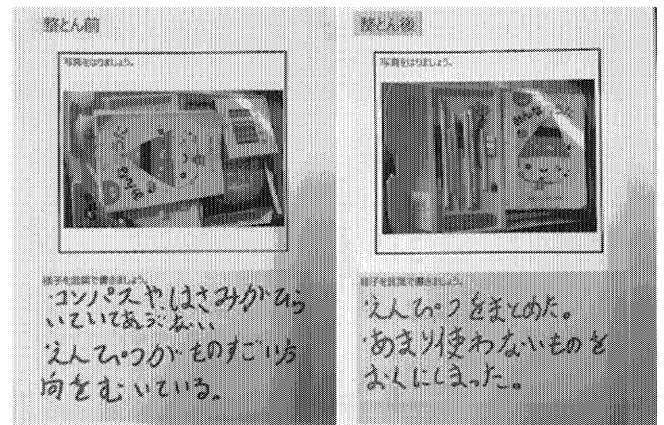
(4) 各手立てにおける子どもたちの様子

【自らの課題を見つける工夫（課題発見）と実際】

身近な話題として、子どもたちの興味・関心を引き出すために、予め故意に散らかした道具箱の写真を撮影し、それを子どもたちに提示した。その写真を見て、子どもたちからすぐに「汚い」、「ぐちゃぐちゃだ」という声が上がった。そして、子どもたちの中には、机の中の自分の道具箱を確認するという姿も見られた。整理整とんの必要性が自分自身に関係があるということに認識させるためには、身近な話題提示は効果的であると考えられた。

【新たな課題を見つける工夫（評価・改善）と実際】

実践前と実践後と比較することができるように、タブレットを用いて子どもたち一人一人の道具箱の様子を写真で記録に残させた。（資料4）



実践前と実践後の記録【資料4】

しかし、今回の実践では新たな課題を発見し、その課題解決に向けて思考を働かせようとする姿を見ることができなかった。

(5) 結果と考察

今回の実践の場合は、「自分の道具箱を整理整とんする」というテーマは、子どもたちにとって生活の課題を発見させやすくしたようであった。ここから、子どもたちに自分自身に関係があるということに認識させ、課題解決に向けて取り組ませるためには、身近な話題提示は効果的であると考えられた。

また課題を写真として残すことができるものであったため、子どもたちは自分の課題に対して、第4時・第5時の実践活動の時間中に、自主的に解決に向けて活動することができていた。

V 研究の実際

1 平成29年度の実践

(1) 実践学級と単元

対称：平成29年度 5年1組23名、5年2組23名
期間：平成30年1月18日（木）～2月28日（水）
単元：「スッキリ 整とん名人」

(2) 本単元における目的

本単元では、児童が自分自身の「課題発見」をできるように、導入で「道具箱の中の整理整とん」という身近な話題を提示し、自分の生活にも整理整とんの大切さは関係があるという認識をもたせる工夫を行う。「評価・改善」の過程では、実践前と実践後と比較できるようにして、自己評価を行った後、他者と相互評価する場を設定する。その上で改善点を考え、新たな課題発見をできるような工夫をする。

(3) 単元計画

次	時	学習内容	問題解決の過程
1	1	○ 道具箱の中が散らかっている様子の写真を見る。 ○ 散らかっていると困ることを考える。 ○ 散らかる理由を考え、どうしたらよいかを話し合う。	課題発見、 検討と計画
2	2	○ なぜ整とんしたり、置き場所を決めたりすることが必要なのか話し合う。	検討と計画
	3	○ 整理・整とんの手順や方法を調べる。	
	4	○ 机の中や清掃道具入れ等の教室内の散らかっている場所を考える。	課題発見、 検討と計画、 実践活動、 評価・改善
	5	○ 何がどのようによくないかを考え、整理・整とんの手順や方法を考える。	
		○ 整理整とんを行い、工夫した点を発表する。 ○ 友達の発表を聞き、振り返りを行う。	

しかし、第5時の「評価・改善」のところでは、課題に対してほとんどの子どもが結果に満足してしまい、新たな課題を発見し、更に生活をよりよくしようというまとめをする姿を見ることができなかつた。活動中には、子どもから聞こえるつぶやきの中から工夫点や改善策につながる考えを多く聞くことができたが、「評価・改善」の過程になるとそのつぶやきを言葉に残すことができていながつた。今後、そのつぶやきを言葉で書き残すことができるように記録の方法を考え、それを基に新たな課題発見につなげるような工夫が必要であることが分かつた。

また、学校での実践後に家庭で散らかっている個所を探し、整理整頓するという実践を第5時と第6時の間に行わせたが、その内容は学んだことが十分に生かされているものではなかつた。このことは、家庭生活につなげることを意識して授業を構成すること、家庭での協力を得るために保護者に対しても働きかけをすることで改善できるのではないかと考えた。

2 平成30年度の実践

(1) 実践学級と単元

対象：平成30年度 6年1組23名、6年2組23名
 期間：平成30年5月30日～7月13日
 単元：「夏をすずしく さわやかに」

(2) 本単元における目的

平成29年度の実践から、「課題発見」の過程で子どもに自分自身に関係があることと認識させるためには、身近な話題提示が効果的であるということが分かつた。本実践でも、身近な話題提示により子ども一人一人が「課題発見」をできるようにし、自分自身が設定した課題に対して、子どもが主体的にその解決に向けて行動できるようにする。

実践は、一度行って満足するのではなく、行った実践を振り返り、改善を加えて再び実践を行うといったように複数回行うことで、よりよい生活を目指す子どもを育む。そのために「評価・改善」の過程では、とりわけ相互評価の時間をグループ単位、学級単位で設定することで、多面的に自分の実践を振り返ることができるようにする。また、平成29年度の実践の課題として、実践活動中のつぶやきを「評価・改善」の過程で生かすことができなかつたことが挙げられた。本実践では、行った実践活動に対しては言葉として毎回記録を残しておくことができるように、ワークシートを準備することとする。

また、平成29年度の実践から家庭で行う実践は保護者の協力も必要であるということが分かつた。そこで、以上の2点に加えて、家庭での協力を得るため、「家庭で実践を行う工夫」を手立ての一つとして加えることとする。

本実践では以上の手立てを通し、自分自身の課題を発見し、その解決に向けて主体的に取り組む子ども、

自分が行った実践を振り返り、新たな課題に対し思考を働かせ、生活の向上を目指そうとする子どもが育つかを検証することを目的とする。

(3) 単元計画

次	時	学習内容	問題解決の過程
1	1	「夏の生活を見つめよう」 ○ 夏をすずしくさわやかに過ごすためにどのような工夫があるか考える。 教科書のイラストや既習の知識を用いて、どのような工夫があるかを話し合う。 ○ 学習計画を立てる	課題発見 評価・改善
2	2	「快適な住まい方を考えよう」 ○ 校内の涼しい場所を探し、なぜその場所が涼しいのかを考える。 ○ 調べたことを基に、涼しく過ごすための工夫について話し合う。	課題発見 計画と検討
3	3	「快適な着方を考えよう」 ○ 夏の衣服の特徴を調べ、どのような衣服が夏に適しているのかを調べる。 現在着用している衣服の素材や形状を調べる。 ○ 夏の衣服の着方の工夫について話し合う。	課題発見 計画と検討
4	4 5 9 (家庭)	「夏の生活を工夫しよう」 ○ 暑い夏に向けて心配なこと、困っていることを自らの課題とし、その解決に向けて活動する。 自らの課題を設定し、オリジナルの提案ができるようにする。 ○ 調べたり実践したことをまとめ、発表できるように準備する。	課題発見 計画と検討 実践活動 評価・改善
5	10	「互いに調べたことを発表しよう」 ○ 互いの発表を聞き、試してみたいことやさらに工夫できることはないかを考え、伝えあう。 発表を聞いたりまとめの資料を見たりして、自分の実生活に取り入れることができるものはないかを考える。	評価・改善 課題発見

(4) 各手立てにおける子どもたちの様子

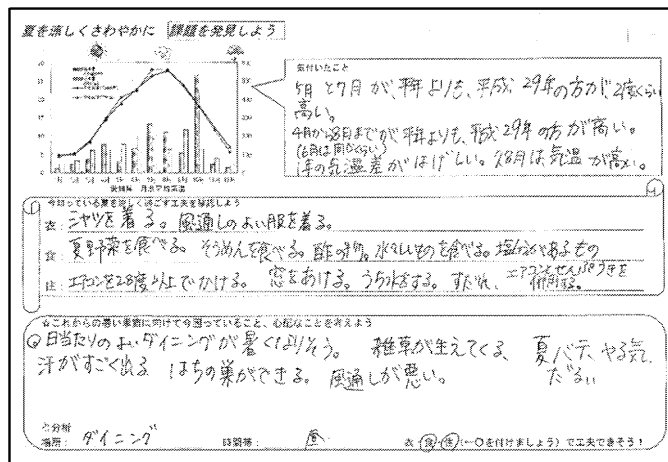
【自らの課題を見つける工夫(課題発見)】

本実践では、身近ではあるが目の前にある課題ではなく、今後予想される課題について考えさせることになる。そのため、課題発見のために思考を働かせやすくするように、課題発見ワークシートを作成した(資料5)。ワークシートには、課題が身近なものであることを示す資料を掲示し、子どもの気付きを書き残す欄や既習事項との関連を検討させる欄を用意した。

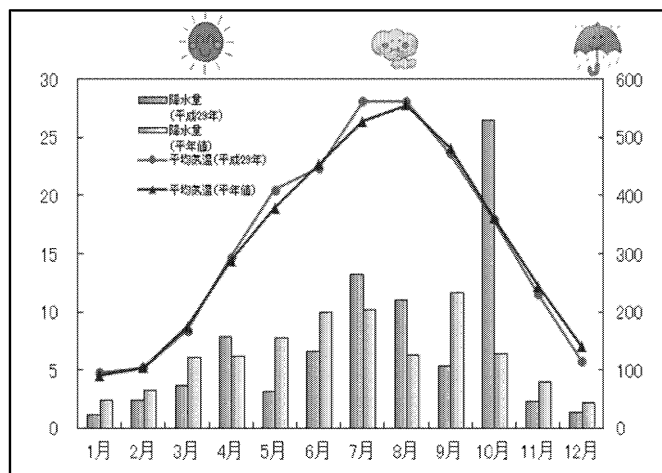
課題が身近なことであることを示す資料として、平成29年の愛知県月別平均気温のグラフを用いた(資料6)。これから迎える夏がとても暑くなるだろうという予想をさせ、それが自分たちの生活に関係があると

いうことを実感させようと考えた。子どもたちには、グラフを見て気付いたことや考えたことを記述し、衣食住の観点から今知っている夏を涼しく過ごす方法とその問題点を書き出させる。そして、自分が書いた考えをグループで共有することで課題の発見をさせようと考えた。

指導の中では、前年との比較をさせることで、年々気温が上昇しているということに気付かせ、さらに生活に工夫をする必要性を強く感じられるようにした。また、共有場面は教師主導により学級全体で行った。そして、課題を見つけることに苦労している子どもも、何か一つは課題をもつことができるように、子どもが発表した課題に対して共感できるかどうかを挙手で確認させ、共感できたものから課題を選んでよいこととした。



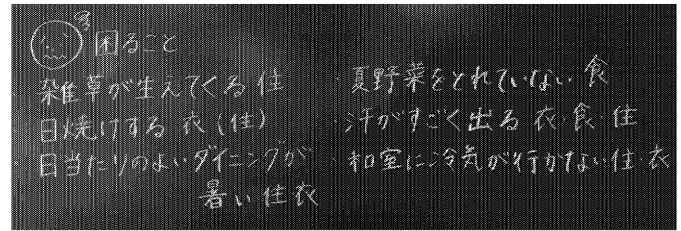
【資料5】課題発見ワークシート



【資料6】愛知県月別平均気温（平成29年）¹³⁾

月別平均気温のグラフを見たことで生活の現状を把握し、今後の生活に向けて課題を見つけることができた児童は多かった。身近な話題を与えることで子どもたちは、次々に課題を発見することができていた。そして、それぞれが出した課題を発表させ、「衣・食・住」のどの工夫で解決できるかを話し合わせると、課

題の解決方法は一つではないことに気付いたようだった（資料7）。



【資料7】授業での板書

【家庭で実践を行う工夫】

授業内で調べたり計画したりしたことを家庭で実践するにあたり、保護者へ協力を仰ぐ文書を作成し、子どもを通して各家庭へ配付した（資料8）。家族が学校の授業で何を学び、何を家庭に持ち帰ってくるかを知ること、子どもたちが家庭での実践に取り組みやすくなったり、家族と共に実践に取り組んだりすることができるのではないかと考えた。また、文書の中で、可能な限り実践後と実践前の写真を撮っていただくように協力を仰いだ。

家庭科の学習におけるご協力をお願い。

現在、家庭科では「夏を涼しくさわやかに」という単元の学習に取り組んでいます。ここでは、これから迎える暑い夏に向けて子どもたち自身が課題を発見し、その解決に向けて生活の工夫を考え、家庭で実践するという活動を行っています。もうすでに、ご家庭で協力をいただき、実践報告をした子どももおります。ご協力ありがとうございます。今週の授業では、さらに改善できる点はないか、他にもよい工夫はないかという考えました。今後報告をする子どもたちがご家庭で実践をさせていただくこととなります。ご迷惑をおかけすることになりますが、ご協力をよろしくお願いいたします。

また、実践報告書を作成する際、可能な限り写真を撮って貼ってくださるよう伝えております。こちらもできる範囲で構いませんので、ご協力をよろしくお願いいたします。

実践報告書作成例。

※こちらの実践報告書は下半分は実際のよかった点、悪かった点の分析、感想などを記入するようになっており、実物はA3サイズのものになります。

今後の学習の予定。

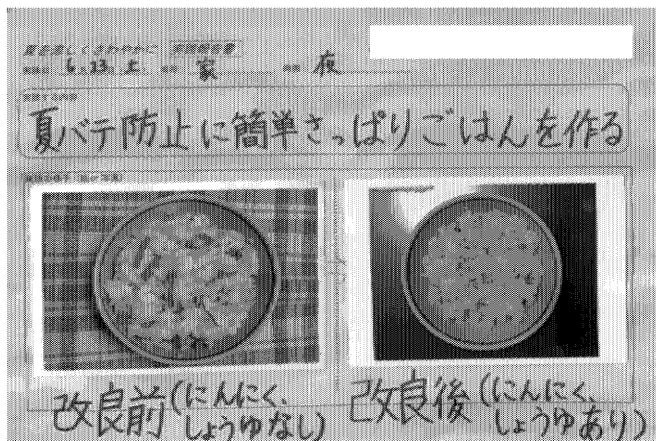
5年1組
 7月4日(水)3、4時間目: 実践報告、発表会へ向けてのまとめ。
 7月11日(水)3、4時間目: 発表会。

5年2組
 7月6日(金)3、4時間目: 実践報告、発表会へ向けてのまとめ。
 7月13日(金)3、4時間目: 発表会。

【資料8】家庭科の学習におけるご協力をお願い

子どもたちは授業内で課題に対する解決の方法について検討し、家庭での実践計画を考えた。そして、家庭に持ち帰り実践した。実践した内容については、次時に子どもたちで共有することができるように実践報告書1及び2に記入させた。実践報告書1（資料9）からは、子どもだけでは実践が難しいと思われる内容のものも家庭の協力を得て行う様子が見られた。そして、実践を写真として残すことができた子どもが多く、何を行ったのかが明確に分かり、学校での共有活動も

スムーズに行うことができた。

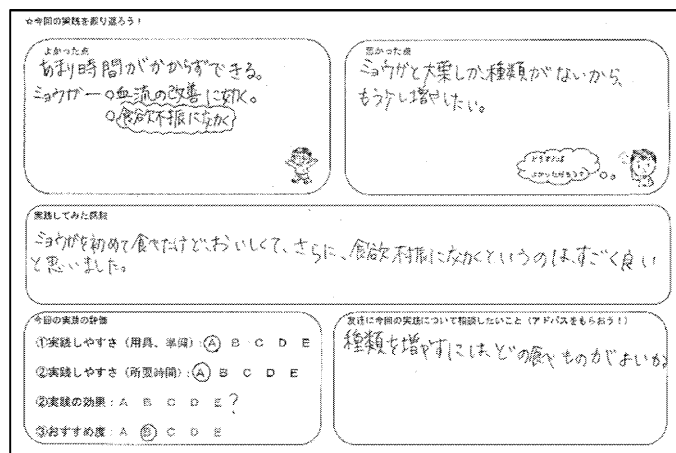


【資料9】実践報告書1

【新たな課題を見つける工夫 (評価・改善)】

実践報告書2 (資料10) では、自分が行った実践を数値と記述によって評価をさせ、そのことで何がどのようによかったか、悪かったかなどを分析させた。また、全体発表の前にグループの中で実践を報告し合うことで、さらに改善できたり工夫できたりすることはないかを、互いに助言ができるように時間を設定した。

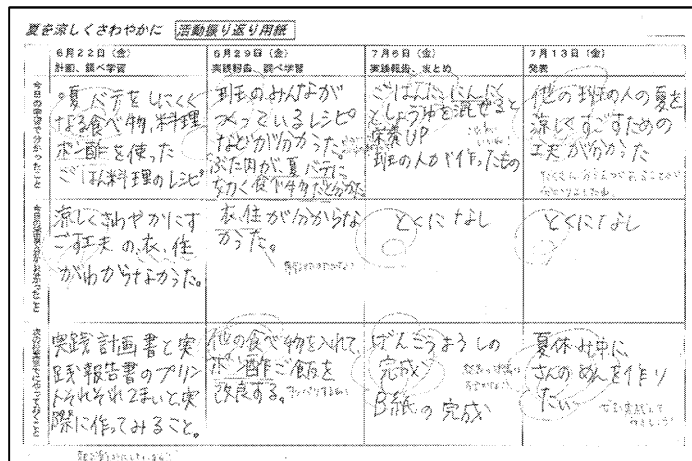
グループでの共有の時間では、他者の実践を意欲的に見たり聞いたりする姿が見られた。しかし、他者の実践に対し、よい点を挙げることはできるが、改善点や工夫点を助言し合うという姿は一部でしか見られず、新たな課題を見つける際に、改善できることや工夫できることを再び自分で調べ直す子どもが大半だった。中には、子ども同士では助言が得られず、教師に相談をする子どももいた。



【資料10】実践報告書2

本単元では、家庭での実践の「評価・改善」を踏まえて2度目の実践を行った。本来ならば2度目の実践についても「評価・改善」を行い、新たな課題を発見し、再び実践を行うべきであるが、今回は2度目の実践を終えた時点での報告を行うことができるように、発表会当日へ向けての準備を進めた。

また、実践に対する「評価・改善」だけでなく、毎授業後に「活動振り返り用紙」(資料11)に記入をさせ、毎授業の学習に対する「評価・改善」を行わせた。子どもたちは本時の学習で分かったこと、分からなかったこと、次の授業までにやっておくことを記入した。そして、授業後に回収したその用紙を、次時の授業の最初に配付し、前時に記入した内容が解決、達成されているかどうかを確認させた。こうすることで、子どもが授業以外の時間にも自分の課題を意識し、その解決に向けて実践活動をするをを目指したが、ワークシートの項目立てが漠然としていたため、課題とは関係のない記入が多く見られた。



【資料11】活動振り返り用紙

家庭で行った子どもたちの実践については、グループで模造紙にまとめ、最後に発表できるようにさせた(資料12)。発表時間は質疑応答を含め各グループ5分とした。1グループ3~4名の構成とし、1人約1分で自身の実践を報告させることとした。子どもたちには、発表用原稿を作成させ、発表練習に取り組ませた。



【資料12】グループでまとめた発表用紙

子どもたちは自分の課題の解決に真剣に取り組んだことで、自信をもって発表を行うことができていた(資料13)。また、発表後に「評価・改善」に関して質

疑応答ができるように、聞いている子どもたちには発表会メモ1を記入させた(資料14)。質疑応答の時間には、他者の発表を聞き、よいところを認めたり、自分の生活に取り入れることはできないかということを考えている子どもたちの様子が見られた。しかし、こうすると更によくなるのではないかという改善点につながる意見はほとんど見ることができなかった。



【資料13】発表会の様子

夏を涼しくさわやかに 発表会メモ1	
☆各組の発表を聞いて、感想(質問やアドバイスをOK)を書いて伝えよう。	
組別	感想
1組	テーマ「夏に食べやすい! 夏バテ予防」 このめん料理を夏休みにぜひ作ってみたいと思った。
2組	テーマ「夏を涼しく! 暑さを防ぐ」 くんのエピソードがすごくいいので、家でも使えそうと思いました。
3組	テーマ「夏を涼しく! 暑さを防ぐ」 さんの1ヶ月の記録は分らないけど、早くできるから、ぜひ作りたいと思った。
4組	テーマ「夏に向けての暑さ対策」 夏野菜を使った料理を作りたいと思った。
5組	テーマ「食べて元気! 夏バテ予防」 自分の夏の記録
6組	テーマ「夏を涼しく! 暑さを防ぐ」 家にかがぬいので、くんのかみけを実践してみたいと思いました。

【資料14】発表会メモ1

夏を涼しくさわやかに 発表会メモ2	
☆自分でもこれほどできそう、やってみたいと思う発表の発表を採ろう。	
採り入れたい発表の発表	採り入れたい発表の発表
1. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	1. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
2. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	2. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
3. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	3. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
4. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	4. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
5. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	5. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
6. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	6. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
7. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	7. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
8. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	8. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
9. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	9. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
10. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	10. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
11. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	11. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
12. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	12. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
13. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	13. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
14. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	14. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
15. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	15. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
16. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	16. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
17. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	17. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
18. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	18. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
19. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	19. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。
20. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。	20. かんぱんボールを半分に切った下の部分に湯をいれて、アイスを入れる。これを繰り返して、アイスを入れる。

【資料15】発表会メモ2

発表会後には模造紙を間近で見合える時間を設け、自分が実際に取り入れてみたいと思う実践を探し、発

表会メモ2にまとめる活動を行った(資料15)。子どもたちは興味をもって互いの実践を見たり、「これはどうやったの?」と声をかけたりする姿が見られた(資料16)。



【資料16】他グループの発表用紙を観察する様子

VI 結果と考察

(1) アンケート結果について

本研究実践により子どもたちに変化が見られたかどうかについて、第IV章で示したアンケートを実施した。5件法によるアンケートを実践前と実践後に行い、その平均値の差を両側検定の t 検定により検討した。その結果、全ての項目について、平均値の差は有意ではなかった(資料17)。

項目	事前 (n=45)		事後 (n=45)		t (88)	p
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
1	4.47	0.92	4.42	0.84	0.34	0.736
2	4.60	0.69	4.51	0.70	0.73	0.471
3	4.73	0.65	4.82	0.44	-1.07	0.290
4	4.53	0.79	4.29	0.84	1.81	0.078
5	3.60	1.01	3.62	0.96	-0.13	0.898
6	3.56	1.08	3.73	1.10	-1.48	0.146
7	3.20	1.22	3.29	1.16	-0.51	0.611
8	4.42	0.89	4.53	0.92	-1.04	0.302
9	3.91	1.08	3.96	1.07	-0.26	0.793
10	2.96	1.22	3.27	1.25	-1.82	0.075
11	3.62	0.89	3.53	0.99	0.55	0.585
12	3.58	1.16	3.76	0.86	-0.96	0.345
13	3.47	1.04	3.64	0.91	-0.92	0.365
14	3.76	0.91	4.00	0.88	-1.71	0.094
15	3.96	0.98	4.04	0.88	-0.50	0.623
16	3.87	1.12	3.84	1.02	0.13	0.896
17	4.02	0.84	3.93	0.96	0.56	0.577
18	4.18	1.01	4.16	1.04	0.12	0.903
19	3.80	0.97	3.91	0.95	-0.78	0.441
20	3.73	1.23	3.67	1.17	0.36	0.722

【資料17】アンケート分析結果

しかし、項目4「日常生活の中で『やってみたい、できるようになりたい』と思うことがある」(「課題発見」に対する意識)、項目10「分からないことや困ったことを解決するために、電話やメール、インタビュー

一等の手段を使うことができる」(「解決の方法と検討」に対する意識)、項目 14「自分が集めた情報や考えた計画に沿って行動することができる」(「解決に向けた実践」に対する意識)という3つの項目については、有意傾向が見られる。これらの項目の変化と、今回のアンケートで特に調査をしたいと考えていた項目 15「実際にやってみたことを振り返り、よかったことや悪かったことを考えることができる」(「評価・改善」に対する意識)に対する変化について考察をする。

(2) アンケートの自由記述からの考察

実践後のアンケートの自由記述欄から、「発表を聞いて、やってみたいと思ったこともあるけど、時間がかかりそうでできないと思ったこともあった」という意見があった。一方で、「すごく簡単だったから、家族と一緒に実践してみたいと思った」、「愛知県は暑い日が多く気温もすごく高いので、涼しく過ごせる方法をたくさん知れて、今年の夏は快適に過ごせそうでうれしい」という意見もあった。このことから、子どもは「実践」するときの利害を考え、その実践が簡単であるかどうか、有益なものであるかどうかで「やってみよう、できるようにになりたい」ということを判断していると考えられる。子どもは、項目4の内容を「課題発見」ではなく「実践活動」として捉え、他者の発表を聞いて、自分の生活にも同様の課題があることを発見できたとしても、その実践が難しいと感じてしまったことが、項目4の平均値を下げた一因と考えられる。

その他の項目については、自由記述欄から関連する内容のものが見られなかったため、聞き取り調査を行うこととした。

(3) 子どもへの聞き取り調査からの考察

アンケート結果の原因を探るため、実践前と実践後の変容が大きかった子ども、実践前と実践後に変容が見られなかった子どもに対して、なぜそのように回答したのか聞き取り調査を行った。その結果を以下のようにまとめた(資料18)。

児童	実践前	実践後	理由	
変容有り	A	⑩1	⑩4	先生や家族に意見を聞いて取り組むことができたから。
	B	⑭2	⑭4	事前に計画を立て、準備しておく実践はスムーズにできたから。
	C	⑮2	⑮4	ワークシートや授業の中で振り返りの場があって、考えやすかったから。
変容なし	D	⑩1	⑩1	誰かに話を聞くことが苦手だから。
	E	⑭3	⑭3	やっている途中で計画とはずれていってしまうことがよくあるから。
	F	⑮5	⑮5	次に同じことをやるとき、前回よりもよいものにして成功させたいから。

【資料18】聞き取り調査の結果

項目10に関して、「評価・改善」のところで、親や教師に尋ねることができた子どもは伸びたが、友達同士では意見が得られなかった。友達との間でよかった点だけでなく、改善点等について意見交換ができていれば、もっと変化が見られたと考える。項目14に関して、「実践」の段階において、計画通りスムーズに実践が進んだかどうかで児童の満足度が変わってくるということが分かった。この点における改善策を考える必要があると考える。項目15に関しては、「評価・改善」の段階で、学習の中でワークシートを用いて振り返りを行わせたり、相互評価を行わせたりする時間を設けることや、振り返りを行うことで次につながるという実感をもたせることが重要であるということが考えられる。

(4) 手立てについてについての考察

【自らの課題を見つける工夫(課題発見)】

身近な話題を提示することで課題が発見しやすくなり、その解決に向けて自主的に活動に取り組もうとする子どもが多かった反面、課題を見つけることができなかつた子どもへの支援にもう少し工夫が必要であった。本研究は「自分の生活にある課題を発見し、その課題の解決に主体的に取り組む」ことを目標としており、教師が課題を提示してしまわないような注意が必要である。しかし、教師が相談相手になって子どもの考えを引き出すことは必要であり、支援が必要な子どもに対してアプローチの仕方を考える必要がある。

【家庭で実践を行う工夫】

平成29年度実践のように、子どもに口頭で呼びかけるのみでは家庭での実践の成果を十分に得ることができない。平成30年度実践では、学校から保護者宛てに文書を出すことで、保護者が家庭で実践を行うように子どもに働きかけたり、共に協力して実践に取り組んだりする様子が伺えた。

また、子どもたちが家庭から持ち帰ってきた実践を学校でどのように深めていくのか、最終的にどのような形で今回の単元をまとめるのかを実践の協力の感謝とともに家庭に知らせることによって、保護者も家庭での実践の必要性を感じたり、今後の家庭科の授業に興味をもつことができたりするのではないかと考える。保護者の協力は、子どもが学習活動を行う上で大きな効果が得られることが分かった。

【新たな課題を見つける工夫(評価・改善)】

新たな課題を見つける工夫として、「評価・改善」の過程に重点を置いたが、相互評価の在り方を今一度検討する必要があると考える。子どもたちは、他者が行った実践のよいところを見つけ、伝えることはできたが、その実践の改善点を指摘する姿はごく一部でしか見られなかった。原因の一つとしては、自分自身の課題ではないことから、他者の課題に対して真剣に考えることができていない子どもがいたことが考えられる。このことから、似通った課題をもった子どもで実践を

共有できるようにグループ編成を行うことで、協力し合い課題の解決に向けて思考を働かせることができるのではないかと考える。

また、「他者の実践の改善点を見つけられたとしても、伝え方を間違ってしまうとその実践を批判したと捉えられてしまう恐れがあることから、考えていたことを伝えにくい」という意見を聞き取り調査の結果から得た。子どもたちには、事前に「助言」として改善点を互いに伝え合うということを理解させた上で活動に取り組ませる必要があるということが分かった。また、日頃から良好な人間関係を築き上げていくように学級経営を行っていくことが、質の高い学習にもつながるのではないかと考える。

そして、アンケート結果や聞き取り調査から、実践したことに対する評価が低かったり、実践内容が難しく手間がかかったりすると、新たな気付きにより課題を再発見する際、「やってみたい、できるようになりたい」と思う意欲が減退することが分かった。実践に対して評価する際、実践の利点を評価し、達成感や認める気持ちをもたせる必要があると考える。

Ⅶ 本実践研究のまとめ

1 成果

自分自身の「課題発見」を設定するために、身近な話題を提示したことにより、子どもは自分の生活にも関係があるという認識をもって活動に取り組むことができていた。そして、学習したことを家庭で生かすためには保護者の協力を仰ぐことが非常に効果的であるということが分かった。また、「評価・改善」の段階で、ワークシートを用いて振り返りを行ったり、相互評価の時間を設けたりすることで、次に行う実践をよりよくしようと考えることができる子どもの姿も見られた。

2 今後の課題

一番の課題は、「評価・改善」後の「課題発見」の段階において意欲が減退してしまったことである。課題を発見できたとしても、その先の「実践」が難しいと感じると「やってみよう」という気持ちが低くなってしまふ。子どもたちには、その難しいと感じる気持ちを乗り越え、実践したことが、自分の生活の向上につながるということをより強く実感させることが大切である。そのためには、課題に対して、より切実性をもたせることが必要であると考えられる。

また、相互評価を行う際は子ども同士の人間関係やコミュニケーション能力のことも考慮に入らなくてはならないということが分かった。授業を行うクラスの子ども一人一人の実態を教師が把握し、グループ編成を行うことで改善が見られるのか、その他にも有効な手立てはないかを今後考え、新たに実践してみたい。

Ⅷ 終わりに

冒頭でも述べたように、子どもたちは現在の生活に

満足しており、生活の課題解決に取り組むという機会が少なくなっている。家庭でも手伝いという形で少しずつ家族の一員として家事などに参加してきている子どももいるが、その参加の程度は家庭によって大きな差がある。家庭科の学習が小学5年生から始まるということは、その時期からは将来自立した生活を送るという意識をもち始めなくてはならないということである。このことを踏まえると、子どもたち自身が自分で家庭生活に携わらなくてはいいと考え、進んで家庭生活に参加していくことが、求められる姿であることに間違いはない。

家庭科の学習は、調理や裁縫は学校で教える前にすでに家庭で経験済みで器用にこなす子どももいれば、必要ないからと考え、知識・技能の習得を疎かにする子どももいる。後者は、将来も自分以外の誰かの力に頼ればよい、その時になったらできるようになればよいと考えている。子どものころから経験を積み大人になる人と、大人になってから始める人では確実に生きる力に違いが出てくる。今の子どもたちが大人になったとき後悔をすることがないように、そして、自分自身で行動を起こすことができる子どもを育てることができるように、これからもその手立てや効果について研究していきたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領」
- 2) 仲間美佐子(2006)『家庭科への参加型アクション志向学習の導入』大修館書店
- 3) 中国由美子(2017)「自ら課題を解決する力を育む家庭科の授業づくりのポイント」『初等教育資料』平成29年8月号
- 4) 荒井紀子、鈴木真由子、綿引伴子編(2009)『新しい問題解決学習 Plan Do See から批判的リテラシーの学びへ』教育図書出版
- 5) 武添寿子(2014)「生活実践力を育む家庭科学習指導に関する研究」広島県立教育センター
http://www.hiroshima-ed.jp/center/wpcontent/uploads/kenkyu/choken/h26_zenki/zen14.pdf (2018.12.8最終閲覧)
- 6) 文部科学省(2015)「教育課程企画特別部会論点整理」
- 7) 文部科学省(2017)「小学校指導学習要領解説家庭編」
- 8) 荒井紀子、鈴木真由子、綿引伴子編(2009)前掲書
- 9) 大竹美登利、倉持清美(2018)『初等家庭科の研究 指導力につなげる専門性の育成』萌文書林
- 10) 河合鈴香、志村結美(2015)「小学生の家族の一員としての認識と自己肯定感の関係性」第58回日本家庭科教育学会大会
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhee/58/0/58_102/article/-char/ja/ (2019.1.20最終閲覧)
- 11) 鳥井葉子(2005)「第4章 家庭科の指導目標と評価」多々納道子、福田公子編『教育実践力を付ける家庭科教育法』大阪教育出版
- 12) 筒井恭子(2017)「生活の課題を解決する力を育む家庭科の授業づくりのポイント」『初等教育資料』平成29年8月号
- 13) 荒井紀子、鈴木真由子、綿引伴子編(2009)前掲書
- 14) 愛知県HPP
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/toukei/0000087774.html> (2018.12.8最終閲覧)